

研究ノート 矢板市小丸山6号墳の再評価

いし ばし ひろし
石橋 宏

1. はじめに
2. 小丸山古墳群の概要
3. 東日本の積石塚の様相
4. 東日本の方形積石塚からみた小丸山古墳群
5. 矢板市十三塚遺跡の様相
6. 収束

方形積石塚である小丸山6号墳の墳丘や埋葬施設の構造を整理し、小丸山古墳群の封土墳との関係を踏まえ、静岡県浜松市二本ヶ谷積石塚群や群馬県高崎市剣崎長瀬西遺跡I区の方形積石塚と比較した。墳丘の築造手順は二本ヶ谷積石塚群と共通し、埋葬施設の竪穴式石槨は群馬県に類例が多いが、群集墳の竪穴式石槨との比較も必要であることを説いた。最後に矢板市十三塚遺跡を紹介し、出土した鑣轡など、馬の飼育についても考慮する必要性を確認した。

1. はじめに

栃木県矢板市大字片岡字小丸山に位置する小丸山古墳群は6基の群集墳である。工業用地造成に伴い平成4(1992)年度に発掘調査が行われ、その成果が報告された(進藤1996)。特に注目を集めたのが長方形の積石の墳丘を持つ6号墳であり、調査者の進藤敏雄はこれを「積石塚」と捉えている(進藤1995、進藤1996)。この調査成果は、矢板市十三塚遺跡(中村1991)から出土した5世紀代の鑣轡の出土例も考慮して、2015年度から設営された栃木県埋蔵文化財センターの常設展示室の一角で、渡来人との関わりで説明されている。

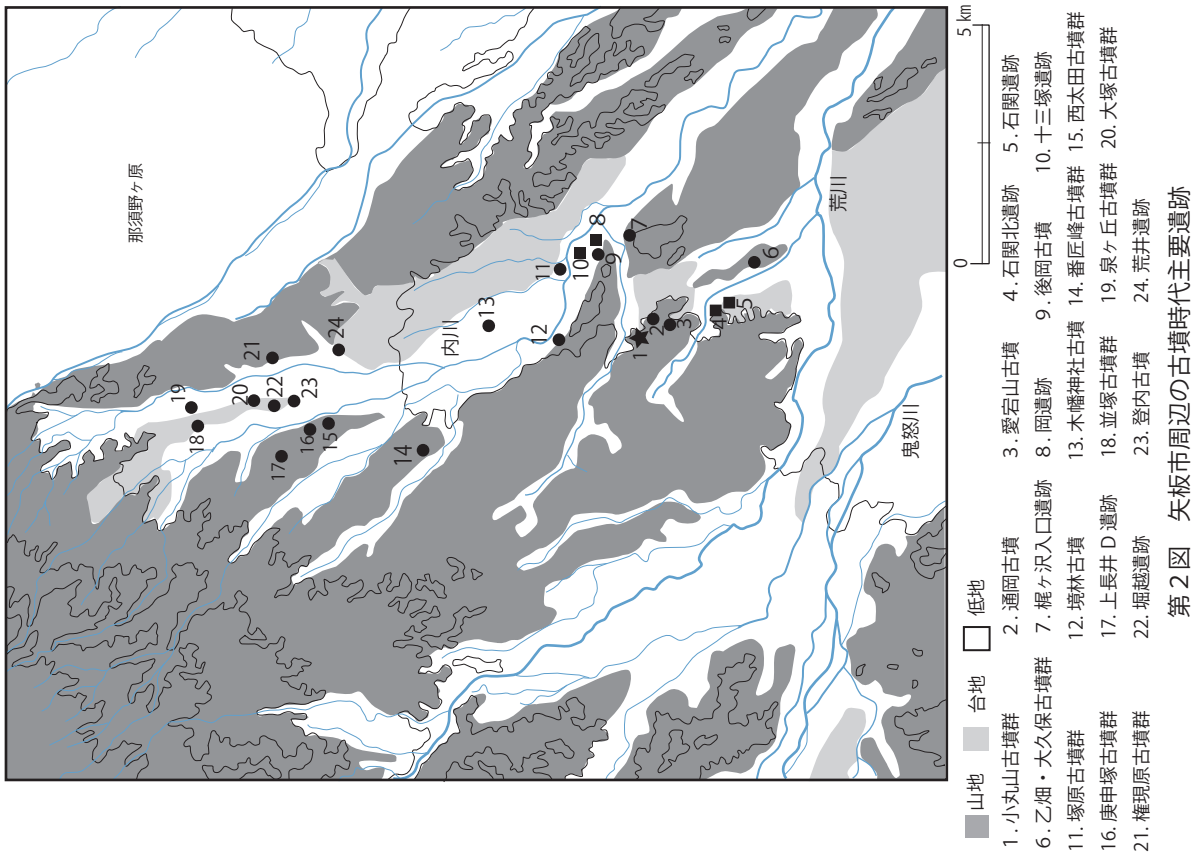
進藤が「積石塚」として位置付けた6号墳は、県内では認知されているものの「積石塚」として国内では浸透していない。筆者は進藤の調査研究成果の重要性を鑑み、改めて小丸山古墳群の調査成果を再確認し、他地域の積石塚との比較を行いたいと考える。

2. 小丸山古墳群の概要

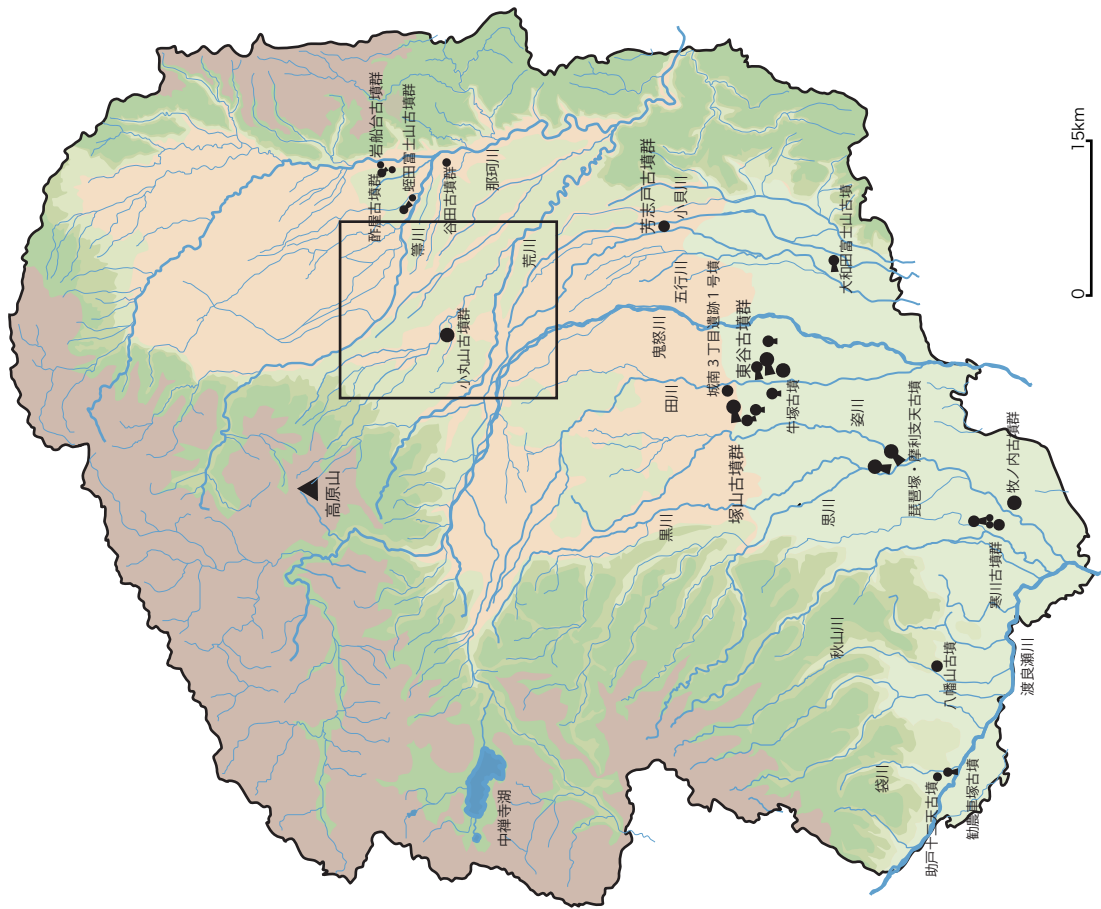
報告書(進藤1996)に従って、整理したい。小丸山古墳群の位置する矢板市は(第1図)、北東に那須野ヶ原台地が広がり、北西には、日光山地に隣接する「高原山」が聳えている。山裾は南東方向に延び、矢板丘陵となり、市の南部を横切る。高原山を源とする幾つもの沢は小河川にまとりながら内川を形成し、最終的に荒川に合流する。丘陵は沢や小河川により開析され、複雑な様相を呈すが、南西に延びる舌状の丘陵(通称小丸山)頂部の南東に開けた緩斜面地に小丸山古墳群は位置する(第2図)。矢板市街の標高は200m付近、小丸山古墳群の立地する丘陵斜面は214m~217mである。

第1表 小丸山古墳群の概要

名称	墳丘形	墳丘内径	墳丘外径	埋葬施設	埋葬頭位	出土土器	埋葬施設出土遺物
1号墳	円墳	15.4m	約18.5m	木棺直葬	N-77°-E	高坏2点・須恵器広口壺1点	刀子1点
2号墳	円墳	最大14.8m	最大18.3m	木棺直葬	N-78°-E	坏4点・小型甕1点・甗1点・甕2点	なし
3号墳	円墳	最大14.2m	最大17.8m	木棺直葬	N-52°-E	坏2点・埴1点・甕2点	なし



第 2 図 矢板市周辺の古墳時代主要遺跡



第 1 図 栃木県の中期から後期初頭の主要古墳

4号墳	円墳	約8.7m	約10.4m	直葬	N-47°-E	坏1点	—
5号墳	円墳	最大10.8m	12.7m	木棺直葬	N-50°-E	—	なし
6号墳	積石塚	—	5.2×4.2m	竪穴式石槨	N-45°-E	出土なし	鉄鏃10点・ 鉄刀1点

古墳群について上記の表にまとめた。1号墳から5号墳が近距離でまとまり、4号墳の北側約45m離れて6号墳が位置する（第3図）。1号墳・2号墳・3号墳を中心とした群内の規模が大きい古墳が平坦な緩斜面地に位置している。6号墳は北側の急斜面地に近い位置に築造される（第3図右上）。

1号墳から5号墳の墳丘と埋葬施設

4号墳と5号墳は墳丘が削平されていたため、墳丘構造が判明する1号墳を例にすると、進藤は「墳丘の下半部は周溝の掘削により、地山を削り出し、上半部は黒ぼく土を旧地表面の上に盛り上げている。築成はまずドーナツ状に土を盛り、その中を満たすようにして行われている」とされ、墳丘築製後に墳丘中央部に墓壇を掘り（第5図）、棺痕跡から長軸3.2m×幅80cm程の箱形木棺（第4図）が埋置されていることを指摘している。群集墳の小規模古墳の築造方法であるが、ドーナツ状に土手状の盛土を行い、内部を埋めて墳丘を築盛する方法は青木敬の指摘する「西日本的工法」に該当する（青木2003）。2号墳や3号墳も同様の構造である。

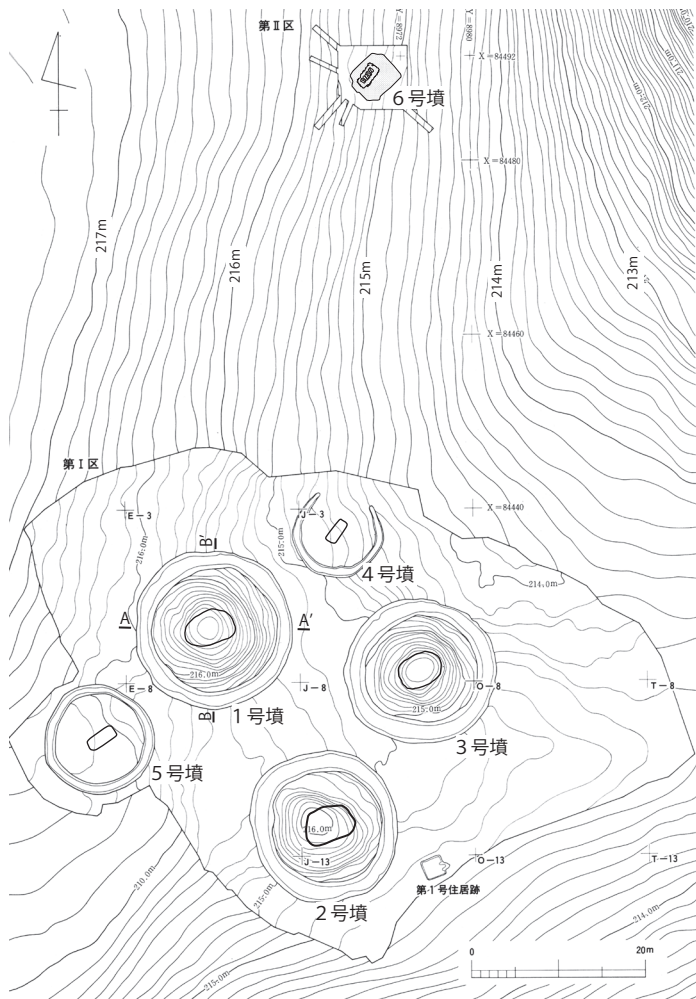
築造時期

3号墳の墳丘下や1号墳・2号墳・4号墳・5号墳の周溝埋土内や1号墳・2号墳・3号墳の墳丘盛土内から榛名山二ツ岳由来のテフラが出土した。3号墳の周溝からは火山灰の一時堆積が認められた。3号墳は墳丘築造直前と墳丘築造後の2回火山灰が降下したと判断し、進藤はそれぞれをHr-FA・Hr-FPと考え、周溝出土土器も考慮し、Hr-FA直後にまず3号墳が築造され、Hr-FP降下以前に1号墳から5号墳が相次いで築造されたと指摘している。出土土器は、墳丘から周溝に比較的早い段階で流失して埋まったものと、周溝が埋没後奈良時代から平安時代に置かれた土器がある。表1は奈良・平安時代の土器は記載してない。出土土器（第6図・第7図）の3号墳出土短脚高坏や2号墳の長胴化した丸甕や模倣坏を考慮すると、6世紀前半の様相である。進藤の指摘通り1号墳から5号墳の築造は6世紀前半と捉えられる。

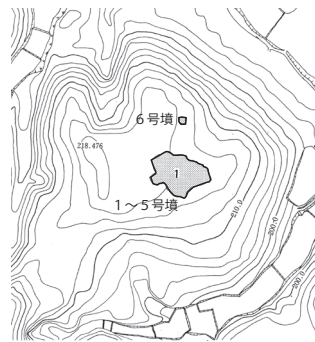
6号墳の埋葬施設と積石の構築順序

6号墳について触れたい。6号墳周辺は開墾されておらず、発見時に積石が一部露出しており、当初から盛土を持たないことが指摘されている。築造順序は以下の通りである（第8図）。

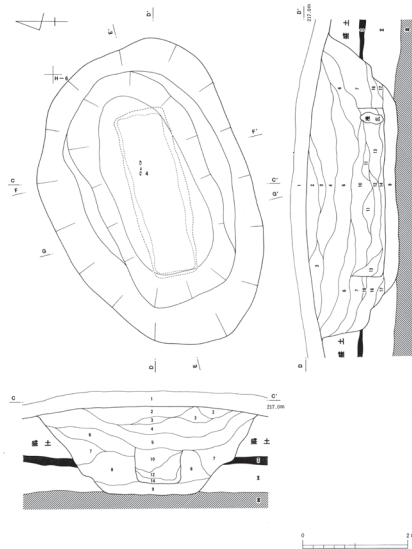
- ① 旧表土面に長軸3m、頭側（北東側）1.5m、脚側（南西側）1.3m、の範囲で石槨掘形を掘削する。
深さは頭部側0.25m、脚部側0.4m。
- ② 人頭よりやや大きめの河原石の平らな面を内側に向け、積み上げていく（第8図中央下）。この石槨の積石の外側にも裏込めの河原石を並べ、隙間を砂礫混じりの白色粘土で充填する。石槨積石は2段目以降はやや小ぶりで扁平な河原石を積んで壁体を構築し、握り拳大から人頭大程度の河原石を裏込めとして不規則に積む。これらの裏込めの石材の間も白色粘土で充填する。小口側は、天井石と同じ石英斑岩の柱状割石を2段積んで構築する。石槨内面は底面で長さ1.71m、頭部側で最大48cm、脚部側で幅30cm。
- ③ 平均0.45cmの高さまで積み上げ、床面及び壁体の下半部に白色粘土を2～7cmの厚さに塗る（第8図右下）。
- ④ 被葬者を埋葬し、被葬者の左側に鉄刀を、右側に鉄鏃を配置する（第9図左）。



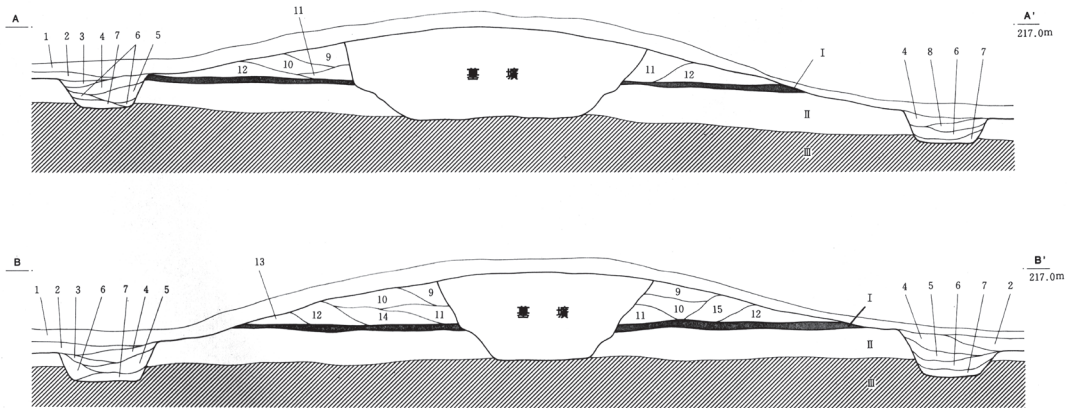
第3図 小丸山古墳群範囲図



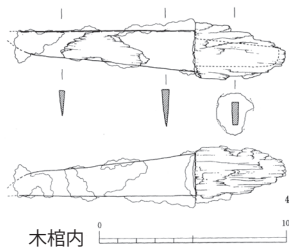
小丸山全体 (5千分の1)



第4図 1号墳埋葬施設



第5図 1号墳墳丘断面図



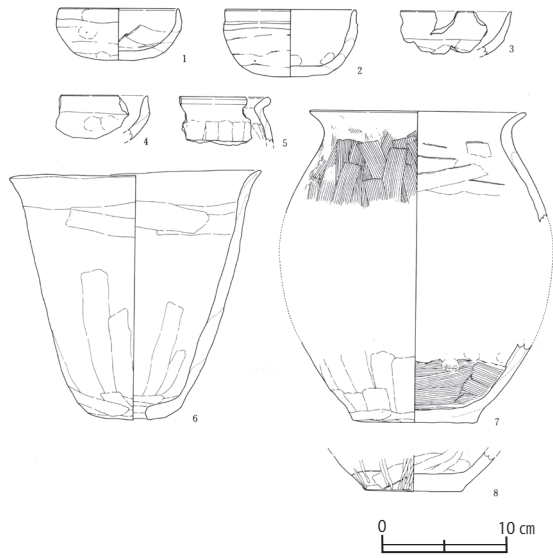
木棺内



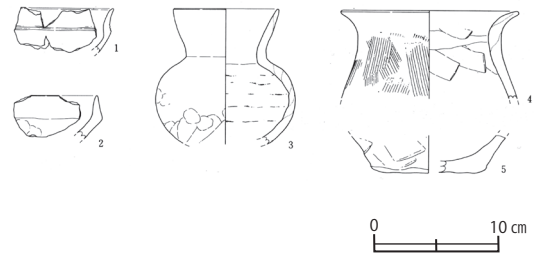
周溝内

第6図 1号墳出土遺物

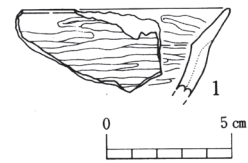
第3図～第6図進藤 1996 より作成



2号墳周溝出土土師器

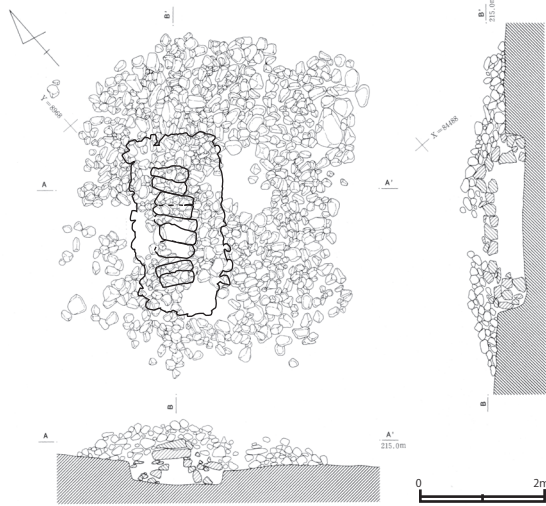


3号墳周溝出土土師器

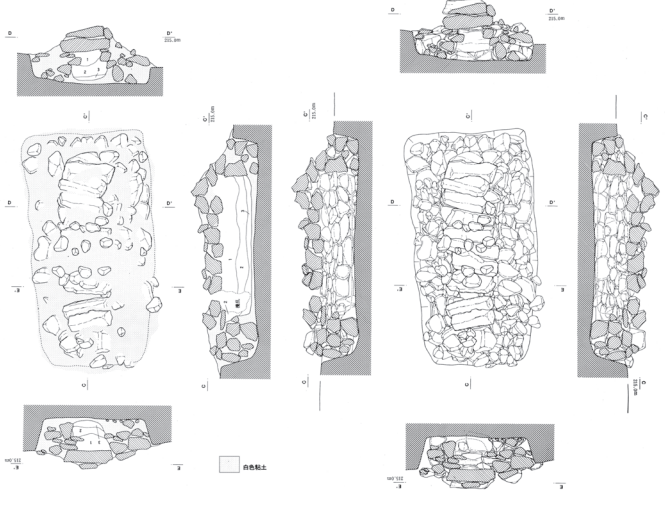


4号墳周溝出土土師器

第7図 2・3・4号墳周溝出土土師器



積石と埋葬施設位置関係



石槨上面粘土

石槨上面



積石



粘土・蓋石除去後石槨



石槨粘土床

第7図・第8図進藤1996及び調査画像より作成

第8図 6号墳の墳丘と埋葬施設

- ⑤ 長さ55～70cm、幅20～30cm重量50kg程度の石英斑岩の柱状割石を天井石として並べ、石槨を密閉する（第8図右上）。
- ⑥ 石槨全面を白色粘土で密閉する（第8図中央上）。
- ⑦ 人頭大よりやや小さい河原石を用いて、平均2～3段、厚い箇所4段積み上げ、積石を長方形上に仕上げる。積石総数2,412個、総重量21t。

これは①から⑥が埋葬施設の構築で⑦が墳丘（積石）の構築となる。埋葬施設は積石の中心から西にずれている点と、積石が複数段積まれている点や、埋葬施設より大幅に積石範囲が広い点を考慮すると、進藤の指摘するように石室の覆い¹⁾ではなく、低平な墳丘（積石）として理解するべきであり、小丸山6号墳は積石塚と捉えるべきである。旧地表面に掘られた墓壇に竪穴式石槨を構築し、掘形内に礫を詰め込む例が群集墳の中心埋葬や墳丘外埋葬に確認され、小丸山6号墳の竪穴式石槨に類似する点や、後述する群馬県西部の積石塚の築造手順との差異、1基しか確認できていない点などから、積石塚として広く認識されてこなかったのではないかと推測する。

6号墳の築造時期

竪穴式石槨から鉄刀と鉄鏃が出土した（第9図）。鉄鏃10点は全て有頸鏃群で1～4は柳葉式で腸袂が明瞭である。6・8・9は鏃身平面形が片刃矢に近いが両刃となるものである。X線では台形関（4・5・6）と棘関（8・10）が確認できるとされ、進藤は6世紀中葉と位置付けられている。棘関を考慮すると水野敏典の編年（水野2013）では後期2段階に位置づけられる。

小丸山古墳群内での6号墳の位置づけ

1号墳から5号墳は6世紀前半に位置付けられ、6号墳の築造は6世紀中葉の時期であり、近接した時期に埋葬された。3号墳・4号墳・5号墳とは埋葬頭位（表1）も近似しており、墓域も共有していることから6号墳も1号墳から5号墳の被葬者と関係があったことは間違いない。立地からは円墳が優位であったと判断している。6号墳を積石塚と認識するならば、他の円墳との異なる点（墳丘や墳形・構築手順・副葬品の差異）は被葬者の出自や表象に関わる問題と考えることができる。

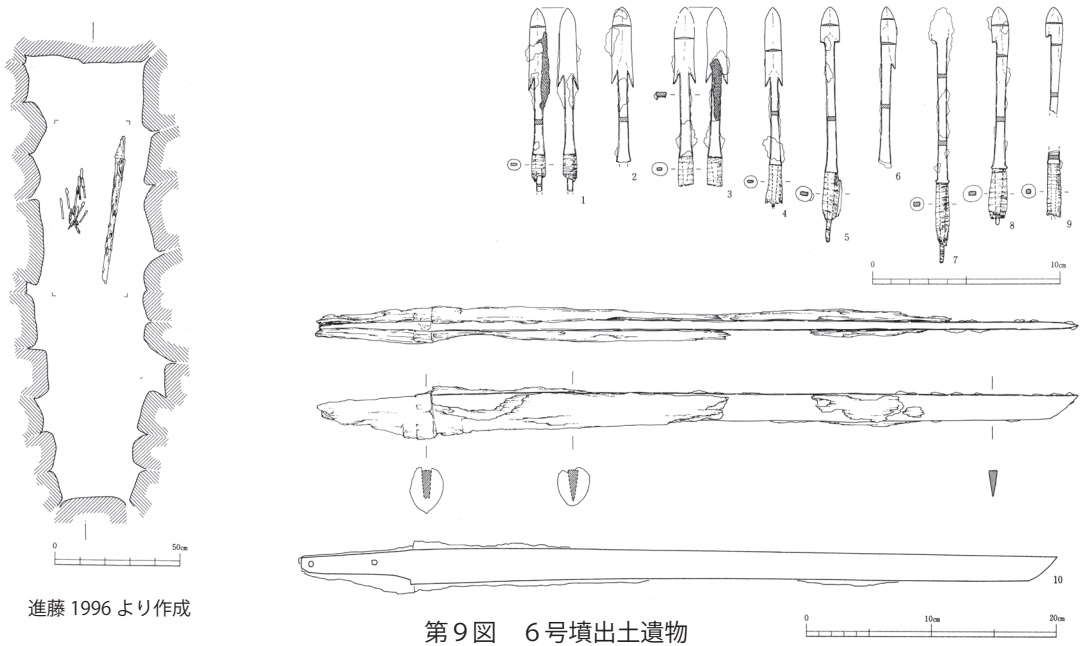
3. 東日本の積石塚の様相

小丸山6号墳の様相を理解するため、東日本各地の積石塚古墳の様相を確認したい。多くの個別検討成果に加え、山梨県考古学協会や日本考古学協会2013年度長野大会での特集（山梨県考古学協会1999・日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会2013）があり、さらに研究成果の集大成である『積石塚大全』（土生田純之編2017）が刊行され、全国の積石塚の様相が明瞭となった。この成果を参考に各地の様相に触れたい。

第10図に東日本における積石塚古墳の分布を示した。長野県の北信地方を中心に総数500基を超える大室古墳群や甲府盆地縁辺部の丘陵地帯に総数170基を超える横根・桜井古墳群の積石塚は円形を中心としており、方形を中心とした積石塚古墳として静岡県浜松市二本ヶ谷積石塚群や群馬県の積石塚が目される。

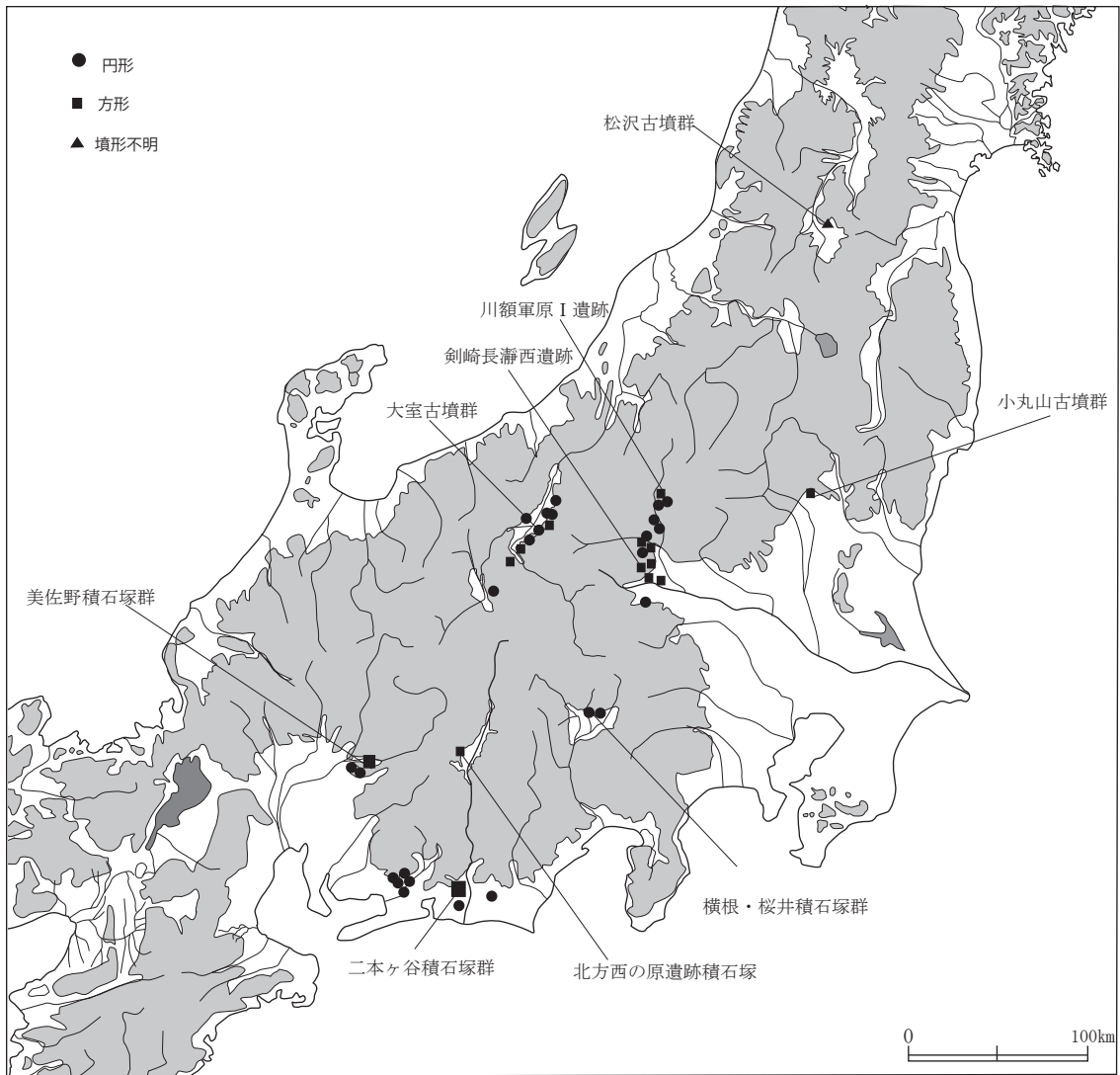
浜松市二本ヶ谷積石塚群の様相

静岡県浜松市二本ヶ谷積石塚群は、周辺の封土墳とは異なり谷地形内部に立地している（第11図上段左）、28基の積石塚は調査の結果、陶邑の須恵器編年のTK216型式期には谷の東側で築造がされ、盛期はTK208型式期にあり、谷の西側や周辺も含め一部6世紀まで存続するとされる。方形ないし隅丸方形を基調とし、規模の大きいものは一辺9mを超えるものの、最も集中するのは、一辺4.5mから6mの範囲であり、一辺2mから3mの小規模のものが確認される。



進藤 1996 より作成

第9図 6号墳出土遺物



第10図 東日本における積石塚の分布

筆者作成

築造過程は、埋葬施設設置個所を浅く掘り、木棺や木槨状の施設を設置してから上部に積石を設置する（第11図上段右）。端部にやや大型の石材を使用して、積石の境界が明瞭なものもあるが、使用する石材に大きな差はないようである。滝沢誠は、韓半島の三国時代の墳墓について埋葬施設より先に墳墓を築く「墳丘先行型」と埋葬施設より後に墳丘を築く「墳丘後行型」が地域により排他的かつ伝統的に分布することを指摘した吉井秀夫の研究成果（吉井2002）を引用し、墳丘後行型の墳墓が分布する半島南部ないし半島西南部地域の墳墓との関連を見きわめる必要性を説く（滝沢2009）。鈴木一有は二本ヶ谷積石塚群が10m以下の方形を基本とした古墳であり、周辺地域の様相（恒武遺跡群など）を踏まえ、地域を束ねる被葬者ではなく、複合的な半島の技術・知識をもたらした外来系渡来系技術集団と想定している（鈴木2017）。墳丘と埋葬施設築造課程は、小丸山古墳群と共通する点が多い。

群馬県の方形積石塚

群馬県西部や北部における積石塚は60例ほど知られ、橋本博文や土生田純之により群馬県の積石塚と同時期の封土墳との詳細な比較が行われ、積石塚は同時期の封土墳に比して規模・立地・副葬品等から下位に属することが明らかにされている（橋本1999、土生田2006）。

5世紀を中心とした剣崎長瀬西遺跡では、TK208型式期を上限として、竪穴式石槨を埋葬施設とした方形の低平な積石塚が、6世紀には渋川市空沢遺跡など円形のものも確認され、無袖式の横穴式石室が採用される事例も増えるものの、小規模で方形の事例やごく小規模の円形の積石塚には、竪穴式小石槨が残存することが指摘されている（土生田2006・若狭2013・2017）。

特に方形の積石塚と剣崎長瀬西遺跡Ⅰ区に着目すると、若狭徹は、方形の積石塚を3類に区分する。1類 方形の基壇（盛土）の上に積石塚を載せたもの。円筒埴輪を持ち、大型。2a類 方形の低平な積石塚で、低い土壇（削り出し）に載るもの。2b類 低平で土壇に載らないもの。1→2a類→2b類の順で外寸が小さくなり、階層差があることを明確にし、剣崎長瀬西遺跡Ⅰ区（第11図中段左）では、中型円墳の長瀬西古墳（径28m）を中核として2a類と2b類がセットなるものが認められ、何らかの集団構成が反映することを指摘している。

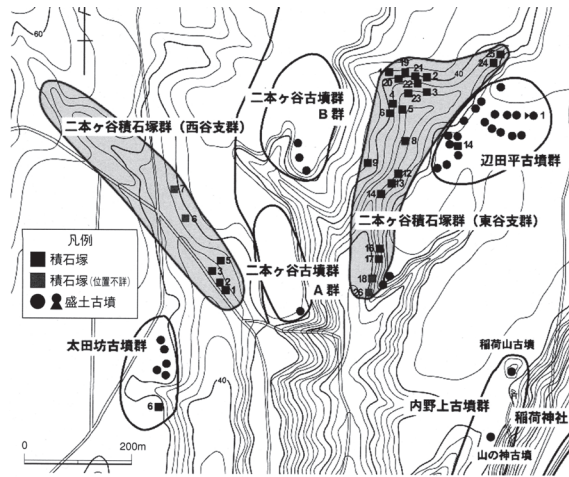
剣崎長瀬西遺跡の調査に携わった土生田純之は、Ⅰ区古墳は方墳と円墳という形態以外に基本的な築造方法や景観（円墳は表面葺石・方墳は積石）に差異はないが、円墳が西から南に余裕のある占地をするのに対し、方墳や積石塚は東側の小谷の間近に密集して築造されおり、明確に区別できることを指摘している。

また、築造方法については、古墳築造予定地を浅く削り出して基壇を形成し、大型墳の場合、この中央に二段目を構築してその中に埋葬施設を構築しており、埋葬施設は地表上（第11図中段右）か二段目の上、あるいは二段目の中に設置されたものであることを指摘している（土生田2006）。同様に指摘されているが、7世紀に築造された昭和村川額軍原Ⅰ遺跡5号積石塚（第11図下段左）も古墳築造地を浅く掘りくぼめ、積石中に竪穴式石槨が設置されていることが良く分かる例である。

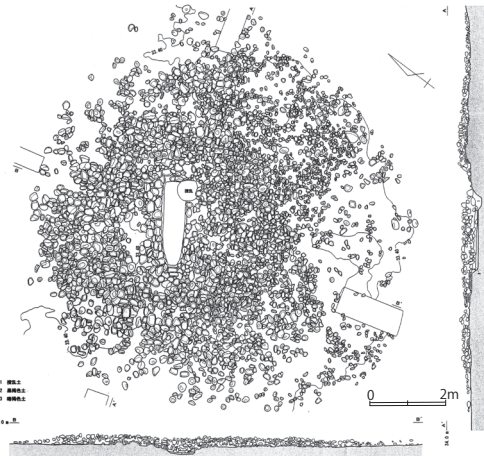
4. 東日本の方形積石塚からみた小丸山古墳群

立地 小丸山1号墳から5号墳が比較的平坦な傾斜面に余裕をもって築造されたのに対し、小丸山6号墳が北側の急斜面に近い位置に築造された点は封土墳が優位な占他を行う他の地域と共通すると考える。古墳築造地は円墳被葬者が優先され、明確に区別された。

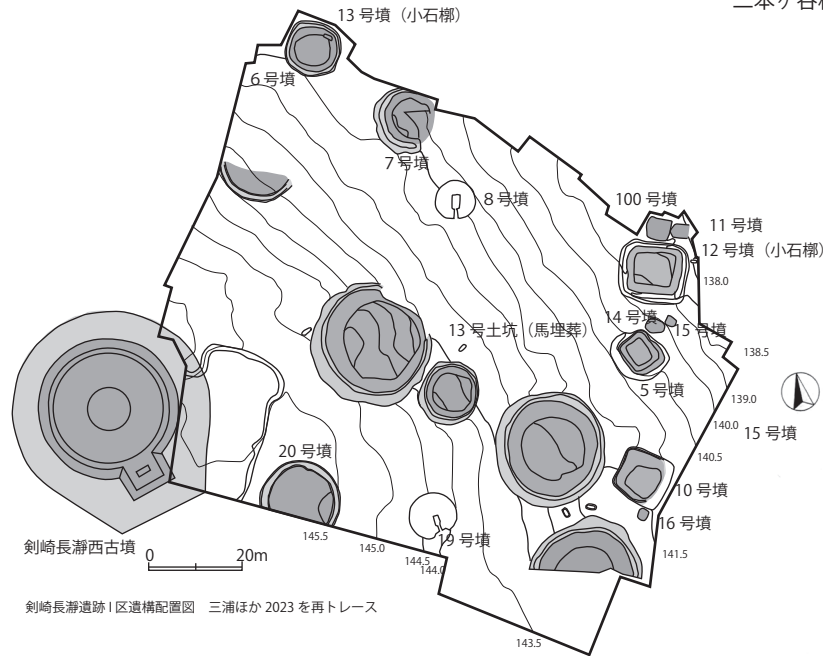
規模・墳丘・埋葬施設 地山に墓壇を掘りこみ、その上部に積石を行う点は二本ヶ谷積石塚群と共通する。木棺や木槨状施設ではなく、竪穴式石槨である点は群馬県の積石塚と共通する。しかし、旧地表面を掘りこん



浜松市二本ヶ谷積石塚群位置図

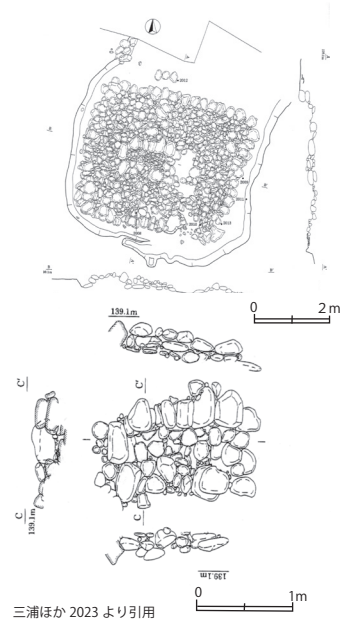


二本ヶ谷積石塚 鈴木ほか 2009 年より引用

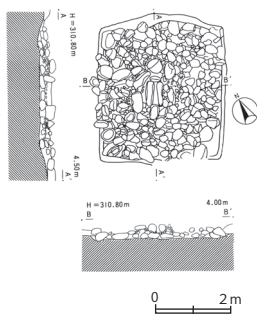


高崎市剣崎長瀬西遺跡Ⅰ区古墳分布図

二本ヶ谷積石塚東谷 13号墳

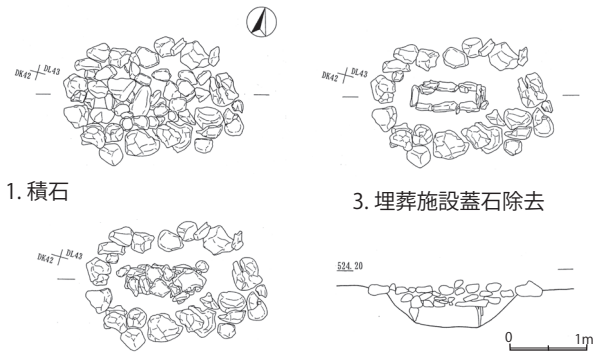


剣崎長瀬西遺跡 100号墳の積石と石櫛



小村 1996 年より引用

昭和村川額軍原Ⅰ遺跡 5号積石塚



2. 積石下部の埋葬施設

4. 積石と埋葬施設断面

渋谷 2017 年より引用

飯田市北方西の原遺跡 SI02

第 11 図 東日本における方形積石塚の諸相

で設置し、床面や蓋石上面に粘土を多用して密封する様相は、群馬県や栃木県の群集墳中の小規模古墳の埋葬施設や、群集墳中の墳丘外側に単独で採用される竪穴式石槨とより類似点が多い。

なお5.2m×4.2mの規模は低平な積石塚では中規模ではないかと考える。

系譜 現状ではどのようなルートで矢板市に導入されたか、絞り込むことはできない。積石塚に限らず、群集墳の墳丘と埋葬施設をより詳細に検討することが必要と考えている。特に北関東や東北地方の5世紀後半から6世紀前半の群集墳に採用される竪穴式石槨や箱形石棺の波及ルートは整理が進んでいるとは言えず、この問題を整理すると、埋葬施設から言及できることも増えると考えている。

5. 矢板市十三塚遺跡の様相

小丸山6号墳が積石塚として判断して問題ないことを記した。

東西を丘陵で挟まれた狭長な地形に積石塚が築かれた背景として、十三塚遺跡6号竪穴建物床面から出土した5世紀の鑣轡から、馬との関わりが想定されてきた。十三塚遺跡について触れたい。

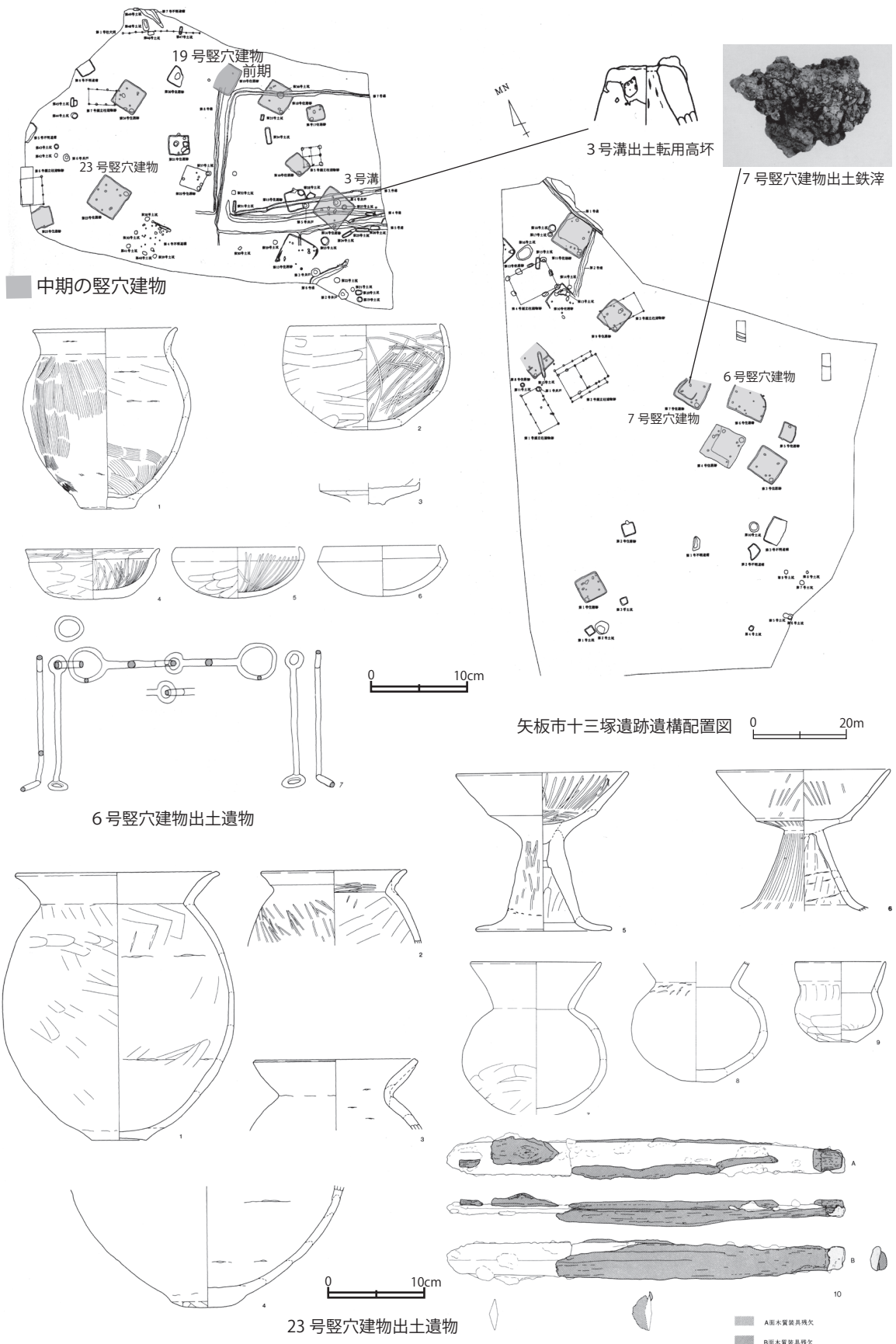
十三塚遺跡は内川に面した喜連川丘陵の北辺に接する低地に位置する(第2図)。東北新幹線建設に伴う調査が行われ、古墳時代中期の竪穴建物3軒が調査された(海老原・竹沢1975)。この調査区を挟んで東西の地区が圃場整備に伴い調査が行われた(中村1991)。圃場整備に伴う調査の遺構配置図が第12図上である。古墳時代中期の竪穴建物と平安時代の竪穴建物・掘建柱建物、中世と推測される溝が確認されている。19号竪穴建物のように前期に遡る事例があるものの、中期の竪穴建物が中心を占める。時期の判明する出土土器が伴う中期の建物は16軒である。明瞭に出土遺物と竈が伴う竪穴建物は確認されていない。鑣轡以外の渡来系文物は確認されないが、鉄器を比較的保有し、小鍛冶を行っていたことが指摘されている(中村1991)。鉄剣が出土した23号建物(第12図下)は平底甕や高坏、埴の残存を考慮すると、6号竪穴建物より古い様相を呈している。7号竪穴建物の床面からは鉄滓(第12図右上)が出土し、14号竪穴建物を壊している3号溝からは土師器高坏転用羽口(第12図上)が出土している。

鑣轡が出土した6号竪穴建物は出土した模倣坏から5世紀後半の年代が与えられ(第12図左)、十三塚遺跡の中期の建物では新しい時期のものである。

6号建物など通常の竪穴建物から出土する鑣轡は、日常的な使用や修繕の場を反映しているとの内山敏行の指摘(内山2006)があり、さらに6号建物出土例を百済系渡来人による馬匹生産の遺品と考える桃崎祐輔の見解がある(桃崎2005)。小丸山6号墳と6号竪穴建物とは時期差があるため、直ちに結びつけるのは躊躇するが、馬の飼育が行われていたと推定すると、積石塚を築くような渡来系人物の活動が5世紀に遡る可能性も考えなければならない。

6. 収束

小丸山6号墳の紹介が中心となり、小丸山古墳群を群集墳としてどのように位置づけるか、検討が及ばなかった。矢板市には同時期の築造で墳丘や埋葬施設が小丸山古墳群と共通点の多い乙畑・大久保古墳群が知られているが、墳丘構造や埋葬施設が周辺地域の動向と対応するのか、その点を踏まえ、再論したいと考えている。



第 12 図 矢板市十三塚遺跡の遺構配置と出土遺物

中村 1991 より引用

註

- 1) 長野県西の原遺跡の積石塚(第11図右下)は、蓋石上面を長方形に礫を積んで覆うものであるが、地表面に礫が露出している。埋葬施設より幅広の長方形の積石であり、墳丘(積石塚)と理解している。

参考文献

- 青木 敬2003「第2章 墳丘構築法の再検討」『古墳築造の研究－墳丘からみた古墳の地域性－』六一書房
- 飯島哲也「序章信濃の積石塚 3 信濃積石塚(大室以外)」『積石塚大全』土生田純之編 雄山閣
- 岩崎浩恵・篠原祐一・進藤敏雄1995『栃木県埋蔵文化財調査報告第159集 乙畑・大久保古墳群』
- 岩原 剛2017「第2章東日本の積石塚 1 東三河、中・東濃」『積石塚大全』土生田純之編 雄山閣
- 内山敏行2006「第7章まとめ 第4節古墳時代中期の群集墳」『栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』
- 海老原郁雄・竹沢 謙1975「十三塚遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第16集 東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書その2』
- 小村正之1996『昭和村埋蔵文化財調査報告書第5集 川額軍原I遺跡』
- 風間栄一2017「序章信濃の積石塚2 大室古墳群の実態」『積石塚大全』土生田純之編 雄山閣
- 黒田 晃2001『高崎市文化財調査報告書第179集 剣崎長瀬西遺跡1』
- 渋谷恵美子2013「長野県南部の様相 飯田市飯田古墳群を中心に」『研究発表資料集 文化の十字路 信州』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会
- 渋谷恵美子・馬場保之・吉川豊2017『北方西の原遺跡』飯田市教育委員会
- 進藤敏雄1995「矢板市南部の群集墳について」『唐澤考古』14 唐澤考古会
- 進藤敏雄1996『栃木県埋蔵文化財調査報告第177集 小丸山古墳群・山苗代A・C遺跡』
- 鈴木一有2017「第2章東日本の積石塚 2 遠江」『積石塚大全』土生田純之編 雄山閣
- 鈴木京太郎・大塚初重・滝沢 誠2009『二本ヶ谷積石塚群保存整備事業報告書』浜松市教育委員会
- 芹澤清八2005『栃木県埋蔵文化財調査報告第287集 堀越遺跡』
- 滝沢 誠2009「二本ヶ谷積石塚群の歴史的な性格」『二本ヶ谷積石塚群保存整備事業報告書』浜松市教育委員会
- 中村享史・日賀野宏志1991『栃木県埋蔵文化財調査報告第115集 十三塚遺跡』
- 日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会2013『研究発表資料集 文化の十字路 信州』
- 橋本博文1999「上野の積石塚再論」『山梨県考古学協会1999年度研究集会 東国の積石塚古墳』資料集
- 土生田純之2013「半島の積石塚と列島の古墳」『研究発表資料集 文化の十字路 信州』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会
- 土生田純之2017「終章 日本列島における積石塚の諸相」『積石塚大全』土生田純之編 雄山閣
- 土生田純之編2017『積石塚大全』雄山閣
- 久野正博・佐野聖子・鈴木京太郎2000『内野古墳群』浜北市教育委員会
- 三浦茂三郎・関口修編『令和5年度高崎市観音塚考古資料館第35回企画展 剣崎長瀬西遺跡を考えるI ー積石塚を含む5世紀の古墳群ー』高崎市観音塚考古資料館
- 水野敏典2013「1 金属製品の型式学的研究 ⑤鉄鏃」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社
- 宮崎公雄2017「第2章東日本の積石塚 3 甲斐」『積石塚大全』土生田純之編 雄山閣
- 桃崎祐輔2005「東アジアの騎馬文化の系譜－五故十六国・半島・列島をつなぐ馬具系譜論を目指して－」『古代武器研究会・鉄器研究会連合研究集会 馬具研究のまなざし－研究史と方法論－』
- 山梨県考古学協会1999『山梨県考古学協会1999年度研究集会 東国の積石塚古墳』資料集
- 吉井秀夫2002「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』43巻3号 考古学研究会
- 若狭 徹2013「群馬県の様相 ー上毛野における4・5世紀の交流と渡来文化(予察)」『研究発表資料集 文化の十字路 信州』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会
- 若狭 徹2017「第2章東日本の積石塚 4 上毛野」『積石塚大全』土生田純之編 雄山閣

研究紀要 第32号

発行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

〒329-0418

栃木県下野市紫474番地

TEL 0285 (44) 8441 (代表)

FAX 0285 (43) 1972

HP : <http://www.maibun.or.jp>

発行日 令和6 (2024) 年3月29日発行

印刷 第一印刷株式会社
